

卷 頭 言 — 木簡学会の原点 —

木簡学会が誕生したのはいまから二十二年前、一九七九年のことである。七五〇七七年度に行われた奈良国立文化財研究所主催の計三度の木簡研究集会を通じ、専門的な学会組織の必要性が強く認識されるに至り、準備委員会の発足を経て同年三月三十一日、ついに設立総会開催の運びとなったのである。同日は午後一時半からの総会のあと、ケンブリッジ大学のローウェ博士による「中国新出土の木簡と帛書」と題する講演があり、翌日は午前・午後に分けて研究発表と討議が行われた。第一回総会および研究集会が開催されたのはその年の十二月一日・二日のことであり、当日には記念すべき『木簡研究』創刊号が会員の手元に届けられた。

創刊号の巻頭言（創刊の辞）を自ら執筆されたのは、今は故人となられた岸俊男先生である。先生は設立準備委員会の代表として、設立総会後は初代の会長として、木簡学会の創設と発展のために尽力された。いまその創刊の辞を改めて読み返すと、そこには木簡研究の課題、調査・研究上の留意点とあるべき姿、木簡学会および『木簡研究』の果たすべき役割・使命など、我々の以て銘すべき指針が簡潔ななかにもすでに余すところなく示されていることを知る。

幸いなことに、その後二十年余を経過するなかで、会員諸氏をはじめとする多くの方々の御努力により、日本の木簡学は着実な発展を遂げて今日に至っている。創刊の辞に指摘された「木簡の出土状況や伴出遺物についての精細・的確な観察・記録」「形状・材質など物に即した精密な考察」を通じた「多種多様な木簡の分類とその性格・機能の究明」といった点がそれぞれである。あるいはまた「日本の木簡の源流である中国の簡牘との関係や、その日本への伝来過程」といった点についても、中国や韓国の研究者を迎えての研究集会の開催などを通じ、確実に認識が深まりつつあると言ってよからう。

しかし一方、そもそも木簡学会が設立された主旨、その果たすべき使命といった点になると、今日それを全うする上でかなり困難な状況が生じてきているのが現実である。「本会は木簡に関する情報を蒐集・整理し、木簡そのものについての研究・保存を推進するとともに、その成果の普及をはかり、史料としての活用に資することを目的とする」（会則第三条）。そのためには創刊の辞に強調するように、会員の「篤志と熱意」、そして何よりも各地で発掘調査を担当しておられる方々との「緊密な連携」が不可欠である。しかし、近年では、「木簡研究」の生命とも言うべき各年度の出土木簡の報告に積み残しが目立つようになってきている。もちろん各調査機関それぞれの事情もあろうが、一つには、木簡学会の目的、「木簡研究」の主旨を十分に理解していただく努力を含め、「緊密な連携」という点でなお反省すべき点があるのかも知れない。いま一つには、会員の「篤志と熱意」に支えられながらも、情報の蒐集、原稿の依頼と整理、会誌の編集といった実務の大部分が、少数の特定の方々の献身的な努力に委ねられ、それに依存してきたという事情がある。創刊の辞に指摘された「木簡出土地の拡大と出土数の増加」が益々進行し、近世の木簡も増加するなか、そのような在り方は限界に近づきつつあり、単に情報の積み残しに止まらず、会誌の編集そのものが次第に困難な状況になりつつあるのである。

一方、それはまた、木簡学会設立の主旨、原点が、今日その重要性を益々高めているということでもある。すでに設立当初の委員はすべて退かれ、木簡研究会から本会設立に至る当時のことを知る者も次第に少なくなりつつある。会員数も大幅に増え、会の性格もいささか変容したようにも思える。折しも今春、緊密な関係にある奈良文化財研究所は独立行政法人となり、この面からも会の体制・組織は検討を迫られていると言える。いま一度設立の原点に立返り、将来にわたってその使命を全うしていくにはいかにあるべきか、それを可能とする学会組織の整備・構築について、全国各地の調査機関との連携について、全会員規模での真剣な論議が必要な時期にそろそろ差掛かっているのではあるまいか。